

学生生活に関する意識調査の結果と考察

A Study on Students' Senses on Their Lives at Tohoku University of Art and Design

川口 幾太郎

KAWAGUCHI Ikutaro

松村 茂

MATSUMURA Shigeru

片桐 隆嗣

KATAGIRI Ryuji

相羽 康郎

AIBA Yasuo

水上 修

MIZUKAMI Osamu

1. The purpose of this study is to get basic material which contributes to further promotion of students' lives at Tohoku University of Art and Design (TUAD) through the research into the actual situation of their senses.

The main findings are as follows:

2. Nearly 70 percents of our students have found their school lives satisfying.

3. The feeling students had entering into our university would affect the rest of their campus life in many ways. The research is intended for those differences among 3 types of 4th year students and some positive results are found.

4. Here we made analysis of activities of our students from their foreign trips and human interchange among a local community or other universities. As a result, TUAD's students make more foreign trips than the Yamagata average and also than the national average, and communicate with neighborhood actively.

5. We investigated the courses of employments and other activities of the first graduating class, with comparison between those of the Department of Design and Engineering and those of the Department of Art.

We compared characteristics of the students of both departments aiming for better employment, higher education or for specialists from various aspects.

6. "Tutorial" activity promotes greater exchange and communication between students and local residents, and develops students' humanity besides their speciality. Meanwhile, offering activities which meet students' demands is required.

1. はじめに

(1) 学生意識調査委員会発足の経緯

平成7年10月、久保学長より「学生生活に関する実態調査」の依頼が学生委員会にあった。これを受けて学生委員会は、その下部組織として委員会を設置し、委員長には川口幾太郎が選出された。委員には、相羽康郎、松村茂、水上修、片桐隆嗣、幸村真佐男が選出され、平成7年11月29日に第1回委員会が開催された。

調査内容について、委員会発足当初は学生生活に関する実態調査を実施するということであったが、この種の調査は、学生課がこれまでに2回実施してきたという経緯を考慮し、本調査は、本学の完成年次であることを踏まえながら、意識調査によってその実態を明らかにすることとなった。

平成7年度、本学が完成年次を迎えたこの大きな節目に、学生がどのような意識で大学生活を過ごしてきたのかを知ることが意義あることといえよう。

尚、本調査は本学特別研究費の助成を受けた。

(2) 調査の概要

1) ねらい

本学学生の意識実態を明らかにすることにより、学生生活のより一層の充実を図るための基礎資料を得ることをねらいとした。

2) 調査内容

調査内容の項目は、以下のとおりである。

I 基本項目

- 1.性別・所属等
- 2.入学時の状況

II 課外活動

- 1.クラブ（サークル）活動
- 2.チュートリアル

III 交流・旅行

- 1.地域との交流
- 2.他大学との交流
- 3.海外旅行

IV 健康意識

V 卒論、卒制の環境（4年生対象）

VI 進路動向（4年生対象）

- 1.進路
- 2.就職

VII 学生生活

- 1.履修・授業
- 2.転部及び転科
- 3.退学
- 4.学生生活の評価
- 5.OB会（4年生対象）

3) 対象及び、回収状況

本調査は、本学在籍学生1492名（平成8年1月1日現在）を対象として実施し、その回収状況は、877名58.7%であった。

4) 調査期間

調査実施期間は、平成8年1月11日～25日までとし、調査用紙の回収を平成7年1月25日とした。

（3）本論の構成及び執筆者

本論の構成及び執筆者は、以下のとおりである。

尚、第2章は調査結果全体の概要をまとめ、第3章以下は各委員の関心に基づき個々の責任で報告することとした。

- | | |
|-----------------|-------|
| 1. はじめに | 川口幾太郎 |
| 2. 基礎集計の結果及び考察 | 川口幾太郎 |
| 3. 入学意志と学業等学生生活 | 相羽康郎 |

- | | |
|---------------------|------|
| 4. 海外旅行及び地域・他大学との交流 | 松村茂 |
| 5. 第一期卒業生の進路動向 | 水上修 |
| 6. チュートリアル活動の意義と課題 | 片桐隆嗣 |

2. 基礎集計の結果

基礎集計結果によって得られた基本項目及び、各項目の結果と考察である。

尚、基礎集計表は、別冊の調査報告書に加えた。

（1）基本項目

1) 回答者の学年、所属

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
芸術	22	17	14	11	64
美術	88	67	54	60	269
生産	57	47	15	9	128
環境	45	31	23	34	133
情報	94	89	33	30	246
合計	306	251	139	144	840

2) 入学時の状況

ここではまず、本学への入学意志に関して尋ねた。

「本学に受験することを決めたとき、本学に入りたいと思っていましたか」という質問に対して、「本学に入りたいと思っていた」と答えた学生は54.2%で最も高く、続いて「他の大学に入りたいと思っていた」33.4%、「何処でもよかった」9.0%であった。そこで、「本学に入りたいと思っていた」を学年別に見ると、4年生47.2%、3年生50.4%、2年生55.6%、1年生57.9%であり、年々増加していることが分かる。

また、本学受験を決めたその理由は、「勉強してみたい学科やコースがあったから」が74.0%で最も高く、続いて「自分の学力に見合っていたから」34.2%、「新しい大学だったから」29.8%であった。このうち、「新しい大学だったから」を学年別に見ると、4年生62.0%、3年生34.8%、2年生23.7%、1年生18.2%と開学初年度以降年々減少し、「勉強してみたい学科やコースがあったから」は、4年生69.7%、3年生71.0%、2年生70.2%、1年生80.2%であった。

（2）課外活動

1) クラブ活動

クラブ活動に参加した学生は59.4%であり、参加しなかった学生を上回っていた。また、「あなたはクラブ活動に満足していましたか」との質問には、「すごく満足していた」が15.2%であり、「どちらかと言えば満足していた」を合わせると60.2%となり、概ね6割の学生が自分の参加したクラブ活動に満足していることが分かった。ところが、その参加度を見ると「殆ど毎回活動に参加した」と答えた学生は全体で35.4%に過ぎず、「2回に1回は参加した」が22.2%、「ときどきしか参加しなかった」は28.2%の学生であった。毎回参加している割合が低いのは、課題、アルバイト、チュートリアル、さらに、複数のクラブに参加している（31.2%）ことなどが原因であると考えられ、また、運動部活動は週1～2日程度、体育館の使用できる曜日に限られたスペースで実施しなければならないことも、毎回の参加に影響を及ぼしていると思われる。

「クラブ活動に参加して良かったことは何ですか」という質問に対しては、「大学内で友人が増えたこと」と回答した学生が69.7%と圧倒的であり、クラブ活動が学生同士の交流を深める好機となっていることが分かる。

一方、不満と答えた学生の理由は、「活動内容が自分の考えと合わなかった」が52.4%であり、つづいて「指導者がいなかった」が24.5%、「対人関係がうまくいかなかった」が20.3%であった。

2) チュートリアル活動

チュートリアルに参加した学生は全体で38.5%であった。これを学年別に見ると、1年生29.9%、2年生35.9%、3年生51.9%、4年生50.0%であり、3年生と4年生で5割に達している。

参加度については、「殆ど毎回参加した」学生は37.3%であり、「2回に1回は参加した」23.0%、「ときどきしか参加しなかった」は27.0%であった。

満足度に関しては、「すごく満足していた」学生は26.8%で、「どちらかと言えば満足していた」を合わせると79.4%と高い割合を占めている。

また、「チュートリアルに参加して良かったことは何ですか」という質問に対しては、「自分の趣味や興味を深めることができた」が51.4%と最高で、「大学内で友人が増えた」51.1%が上位を占め、「自分の専門以外の知識や技術を学ぶことができた」41.0%、「良い思い出

ができた」40.1%と続いた。

一方、チュートリアルに参加しなかった学生に対する「参加しなかった理由は何ですか」という質問に対しての回答は、「活動内容に魅力を感じなかったから」34.4%、「授業や課題で忙しかったから」33.0%、「アルバイトで忙しかったから」30.3%、が上位を占めた。

(3) 交流・旅行

1) 地域との交流

本学学生が何らかの形で地域との交流をもったのは全体で31.4%であり、学年別には1年生から順に18.7%、31.4%、42.3%、49.6%と在籍年数との相関がみられた。そして、その形式は地域のイベントとしての交流が60.2%と圧倒的であった。

2) 他大学との交流

他大学との交流をもった学生は36.6%であり、学年別には1年生から順に32.6%、33.1%、42.5%、46.4%と地域との交流と同様に在籍年数と関連している。また、地域との交流と比べると、1年生の割合だけが高くなっている。そして、交流の形式は、「友人として」46.9%と「サークル活動を通して」36.7%が圧倒的であった。

3) 海外旅行

海外旅行を体験した学生は、全体で16.3%であり、旅行先のトップは、ヨーロッパ・ロシアの46.6%であり、東南・東アジア24.4%、北アメリカ17.6%、ハワイ13.7%と続いた。体験した海外旅行に「とても満足している」学生は63.4%であり、「まあまあ満足している」を合わせると94.7%であった。また、海外旅行を体験した学生の86.2%が学生時代に海外旅行へは行くべきと考えていることが分かった。

(4) 健康

1) 健康意識

健康意識に関する質問のうち、自分自身に「大いに当てはまる」と答えた学生の割合の最も高かったのは「ボーとしてしまうことが多かった」の22.6%であり、続いて「イライラすることが多かった」の20.7%であり、これらに「少し当てはまる」を合わせるといずれも7割に達した。これを学年別に見ると、これらを含むすべての回答に4年生の割合が最も低く、他の学年に比べて安定した気持ちで生活している傾向にあることが窺えた。

生活面に関する質問では、最も割合の高かったのが「運動不足だった」であり、「大いに当てはまる」と「少し当てはまる」を合わせて83.6%であり、「生活が不規則だった」82.7%、「食事が偏っていた」70.5%といずれも非常に高い割合を占めた。

また、「日頃あなたは気分転換のためにどのようなことをしていますか」という質問に対しては、「友人と会話をした」が56.1%で最も高く、続いて「音楽を聴いたり、楽器演奏をした」55.7%、「買い物に出かけた」29.2%、「カラオケに行った」28.2%であった。また、「運動をした」22.8%は「お酒を飲んだ」25.4%を下回った。多くの学生が運動不足と感じながらも、気分転換のために運動する学生は少ないということが分かる。

2) 悩みや不安

学生の悩みや不安について尋ねたところ、「勉学について悩みや不安を感じるが多かった」は、「大いに当てはまる」が26.8%で、これに「少し当てはまる」を合わせると74.7%にも達していた。続いて「就職について」の56.4%、「金銭問題について」54.8%、「自分の性格について」53.2%、「人生観について」52.8%などが5割に達していた。

(5) 卒論・卒制の環境

4年生を対象に、卒論・卒制の仕上がりへの満足度について尋ねたところ、概ね5割の学生は満足しているようであった。そして、卒論・卒制の環境について見ると、「卒論・卒制に必要な資料等が十分に揃っていた」との回答は、わずか19.8%であり、「図書館の資料が不足であった」32.9%、「研究論文が不足であった」12.0%、「研究雑誌が不足であった」15.0%などの、不足を感じていることが分かった。

(6) 進路動向

この項目は4年生対象である。

1) 進路

4年生を対象に、卒業後の進路について尋ねたところ、「就職する」が42.6%であり、「進学する」24.0%、「個人で専門職をめざす」10.9%と続き、「未定」が22.5%であった。

2) 就職

4年生が、就職先について具体的に考え始めた時期は

「3年生の後期」が41.4%と最も高く、「4年生の前期」29.3%、「2年生の後期」13.8%と続いた。また、会社訪問や勉強会など具体的な就職活動は「4年生の前期」が63.2%で最も高く、「3年生の後期」24.6%、「4年生の後期」7.0%と続いており、他大学の学生に比べて遅い傾向にあった。

「就職先と大学で学んだ専門分野とは関連がありますか」という質問に対しては、「すごく関連している」が41.1%であり、「どちらかといえば関連している」を合わせると75.0%であった。

(7) 学生生活を振り返って

1) 履修・授業

ここでは、履修・授業に関して尋ねた。

「専門分野の学習や制作に熱心に取り組んだ」に対して、「大いに当てはまる」は23.7%、「少し当てはまる」を合わせて64.7%であり、「課題やレポートは期日までに提出した」77.7%、「講義内容は理解できた」62.6%などいずれも6割を超えている。しかしその一方で、「授業をさぼることはなかった」は34.6%であり、「授業に遅刻することはなかった」は31.0%と低く、授業をさぼったり、遅刻した学生が6割以上いることが分かった。

また、「一般教養の学習に真面目に取り組んだ」学生は、41.3%であった。

2) 転部・転科

コース、学科、学部の変更を考えたことのある学生は、それぞれ8%、10.7%、11%であった。そして、その理由で最も多かったのは、「専攻分野があわなかった」の42.6%であり、「授業が面白くなかった」35.9%、「就職を考えると不安だった」22.3%、「カリキュラムに制約が多かった」11.3%と続いた。

3) 退学

退学を考えたことのある学生は、30.6%であり、その理由は「大学の授業に魅力を感じなくなったから」52.2%で最も高く、続いて「自分の将来が不安になったから」29.6%、「何となく」14.6%であった。

4) 学生生活の評価

ここでは、学生生活の成長感、充実感、意味について尋ねた。

まず、「これまでの学生生活を振り返って、あなた自

身どのような変化がありましたか」に対して、「大いに当てはまる」と答えた学生の割合が最も高かったのは、「沢山の友人や知人をつくることができた」の34.5%であり、「少し当てはまる」を合わせると78.0%であった。続いて、「いろいろな角度から物事を見ることができるようになった」75.6%、「自分の専門分野の知識や技術を身につけることができた」73.9%であった。

次に、「これまでの学生生活は充実していましたか」という質問に対しては、「とても充実していた」との答えが14.7%であり、「まあ充実していた」を合わせると70.1%であった。これを学年別に見ると、1年生60.9%、2年生67.9%、3年生81.8%、4年生83.2%と、学年が上がるにつれ、充実している学生の割合が高まる傾向を示していることが分かる。

そして、「これまでの学生生活はどのようなものでしたか」という質問に対しては、「専門的な知識や技術を習得する場であった」の23.1%が最も高く、「沢山の人と出会い交流することで人的ネットワークをつくりあげていく場であった」22.2%、「豊かな教養を身につける幅の広い人間性を育てる場であった」22.1%と続いた。

5) OB会

これは、4年生を対象とした項目である。

「OB会は必要だと思いますか」という質問に対し、「必要だと思う」と答えた4年生は36.3%にとどまっているものの、「必要だと思わない」はわずかに11.1%と低かった。また、「どちらとも言えない」が38.5%、「わからない」は14.1%であった。

また、OB会は必要だと答えた学生が、その目的として相応しいと思うのは、OB同士の親睦・情報交換であり、活動内容として相応しいのは、同総会の開催と名簿の発行と考えているようである。

さらに、運営方法としては「大学の認定と協力を得た自主的運営」46.9%、「大学の運営」32.7%と、何らかのかたちで大学からの関与を期待していることが分かった。

(8) まとめ

基礎集計結果から、以下のことが明らかとなった。

①受験の際、本学への入学を希望して受験する学生は毎年増加傾向を示し、受験を決める理由としては「学科やコースへの関心」が最も高い割合を占めていることが分

かった。また、「新設であることへの関心」は急激な減少傾向を示した。

②クラブやチュートリアルへの参加は、友人関係に良い影響を及ぼしていることが分かった。また、チュートリアルに関しては、参加した学生の8割がその活動に満足していた。

③海外旅行を体験した学生は、学生時代の旅行は是非行くべきと考えていることが分かった。

④本学学生の8割が日頃、運動不足であると感じていることが分かった。

⑤4年生は他の学年に比べて、安定した気持ちで学生生活を過ごしている傾向にあった。

⑥卒論・卒制の際、5割の学生が図書館の資料等何らかの不足を感じていた。

⑦開学初年度入学生の就職活動開始時期は、他大学の学生に比べ、遅い傾向にあった。

⑧本学学生の6割が、専門分野の学習や制作に熱心に取り組み、期日までに課題やレポートを提出し、講義内容も理解したと答えている一方で、授業をさぼったり、遅刻した学生も6割であった。

⑨本学学生の7割が、有意義で充実した学生生活を過ごしてきたと考えている。そして学生生活の意味は、専門的な知識や技術を習得し、豊かな教養を身につけ、人的ネットワークをつくりあげていくことであった。

⑩学生生活の充実度は、学年が上がるにつれ、より高くなる傾向にあった。

⑪OB会が必要だと考えている学生は、大学がOB会の運営に何らかのかたちで関与することを期待している。

3. 入学意思と学業等学生生活

(1) 入学意思と学業・生活・就職

学生は東北芸術工科大学に是非入学したかったという幸福なものばかりではない。他の大学を目指していたがその試験に落ちてしまったから、本学に入学した学生もいる。また、アンケート質問にしたがえば、大学ならどこでもよかったという学生もいる。このように、入学時の動機づけが異なるグループの学生たちはその後、どのようにして学業を遂行し、卒業制作を行い、就職して行ったのであろうか。入学時の意思はどのくらい引きずられるものなのか。あるいは芸工大生としてのアイデンティティを身につけて、入学時の意思など忘れ去られてしまうのであろうか、ここでは、以上のような問題意識から、入学意思と学業全般との関係を、4年生のアンケート結果のクロス集計グラフにもとづいて分析する。

1) 入学意思とクラブ、チュートリアル (図3-1 参照)

「入学意思」については、「1. 本学に入りたかった」、「2. 他の大学へ」、「3. どこでも良かった」の回答別 (以降入学意思1、2、3として表示) に、「クラブの参加度」(1. ほとんど毎日、2. 2回に1回、3. ときどき参加、4. ほとんど参加せず) を比較すると、「入学意思2」の学生にもっとも積極的なクラブ参加が見られた。「チュートリアル」については、「1. ほとんど毎回」以外はクラブへの参加度と同じ回答項目であり、参加度3. までを参加と

みなすと、大きな差はないものの入学意思1、2、3の順に参加度が低くなっている。

2) 入学意思と勉学上の悩み・転科など (図3-1 参照)

「教員との悩み」は、「1. おおいに」、と「2. 少し」を合わせると、「あてはまる」とする者が入学意思2で多く、入学意思1では少ない。「大学・学部が合わない」はあてはまる者の割合も差も小さいが、「4. まったくあてはまらない」、つまりおおいに合う者は入学意思2で少ない。「勉学の悩み」は入学意思2であてはまる者が多く、3で少ない。「退学を考えたこと」は「1. ある」が入学意思1で少ない。「コース・学科・学部の変更」では、「コース」は入学意思1、2、3の順に少なく、「学科」はこの順に多くなっているが、大きな差はない。

3) 入学意思と授業態度 (図3-2 参照)

「提出期日を守った」では、「1. おおいに」と「2. 少し」を合わせると、あてはまるとする者が入学意思2で少ない。「さばらなかつた」でも差は小さいが入学意思2で少なく、入学意思1で多い。「専門科目学習熱心」ではやや入学意思2であてはまるとする者が多く、「一般教養科目熱心」では入学意思2で少ない。「専門講義に満足」では、「1. おおいに」も「2. 少し」も、入学意思2で当てはまるとする者が少なく、「1. おおいに」は入学意思1が、「1. おおいに」と「2. 少し」を合わせると、入学意思3が多い。総じて授業態度が良いのは、入学意思1「本学に入りたかった」で、3「どこでも良かった」

がこれに続き、2「他の大学へ」は最もあてはまる者が少ない傾向があるけれども、専門科目の学習熱心だけは多くなっている。

4) 入学意思と自己達成観・卒制満足度 (図3-2 参照)

「専門分野で成長」に関しては、「1. おおいに」と答えた割合が、入学意思1、2、3の順に低くなっているものの、「2. 少しあて

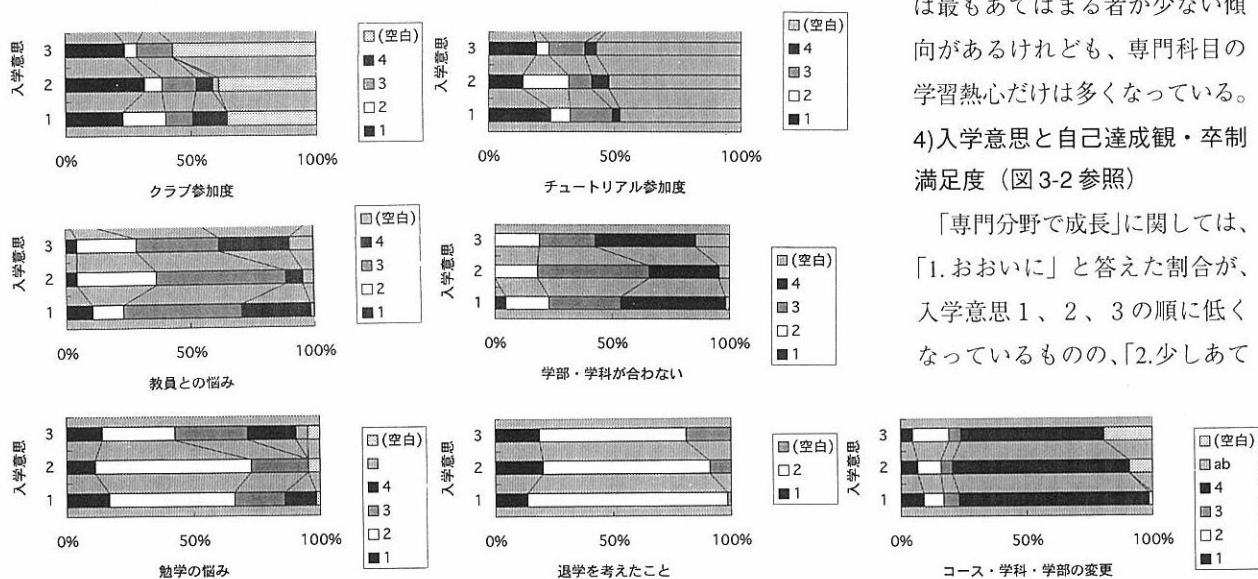


図3-1 入学意思と課外活動、勉学上の悩み他

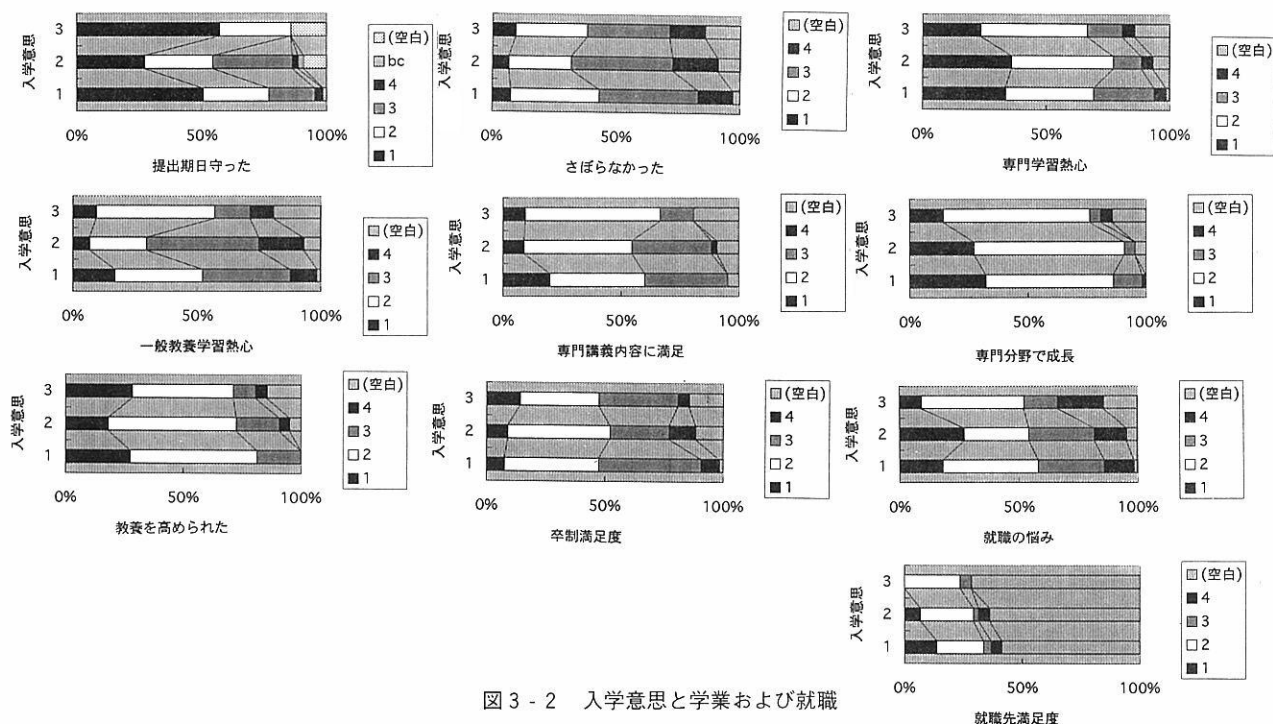


図3-2 入学意思と学業および就職

はまる」と合わせると、入学意思2でやや多くなる。「教養を高められた」については入学意思2で「1.おおいに」がやや少く、「2.少しあてはまる」と合わせると差は小さいものの、入学意思1がやや多い。「卒制満足度」については差は少なく、「1.おおいに」が入学意思3で多く、「1.おおいに」と「2.少しあてはまる」を合わせると、入学意思2でやや多くなる。

5) 入学意思と就職 (図3-2 参照)

入学意思が就職に直接関連するとは考えにくいですが、学業や学生生活への取組みに入学意思による差がある場合、それらの結果として就職に影響する可能性はある。「就職の悩み」については、「3.あまり」「4.まったく」あてはまらない者が、入学意思3でやや少なく、「1.おおいに」あてはまる者が入学意思2で多い。「就職先満足度」になると、無回答がたいへん多く、「1.おおいに」および、「1.おおいに」と「2.少しあてはまる」を合わせた者は、入学意思1、2、3の順に少なくなっている。

(2) 学業等と学生生活

入学意思が学生の授業態度などに影響することはほぼ明らかとなったが、講義内容の満足感や理解度を中心に授業態度などとの関連を究明する。

1) 専門講義内容満足度 (図3-3 参照)

専門講義内容の満足度は、「1.おおいに」と「2.少し」

「あてはまる」がそれぞれ無回答を除く回答者合計の16%、50%で、「3.あまりあてはまらない」が34%である。「専門講義内容満足度」1、2、3.ごとの授業態度をみていく。まず、「さぼらなかつた」については、「1.おおいに」と「2.少し」「あてはまる」がそれぞれ無回答を除く回答者合計の9%、33%であり、「専門講義内容満足度」が、1、2、3.となるにつれて明瞭に、「さぼらなかつた」と答えた者が減少している。一方、「3.あまりあてはまらない」と「4.まったくあてはまらない」、つまり、かなりさぼった、とおおいにさぼった者の比率はそれぞれ無回答を除く42%、17%であり、「専門講義内容満足度」が、1、2、3.となるにつれて、前者の増大、後者の減少を示し、「専門講義内容満足度」が高いほど、本人の自覚では「おおいにさぼった」とになる。しかし、「専門講義内容満足度」が高いほど「おおいに」、「少し」さぼらなかつた傾向は明らかである。

「専門分野学習熱心」については、「1.おおいに」と「2.少し」「あてはまる」はそれぞれ無回答を除く回答者の35%、40%を占める。「専門講義内容満足度」とさらに明瞭な正の相関が見られ、特に「1.おおいに」あてはまる者の比率の差が顕著である。これは「1.おおいに」と「2.少し」を合わせた場合、さらに「3.あまりあてはまらない」を合わせた場合にも同じである。以上から、専門講義内容の満足度が大きいほど授業態度が良くなる傾

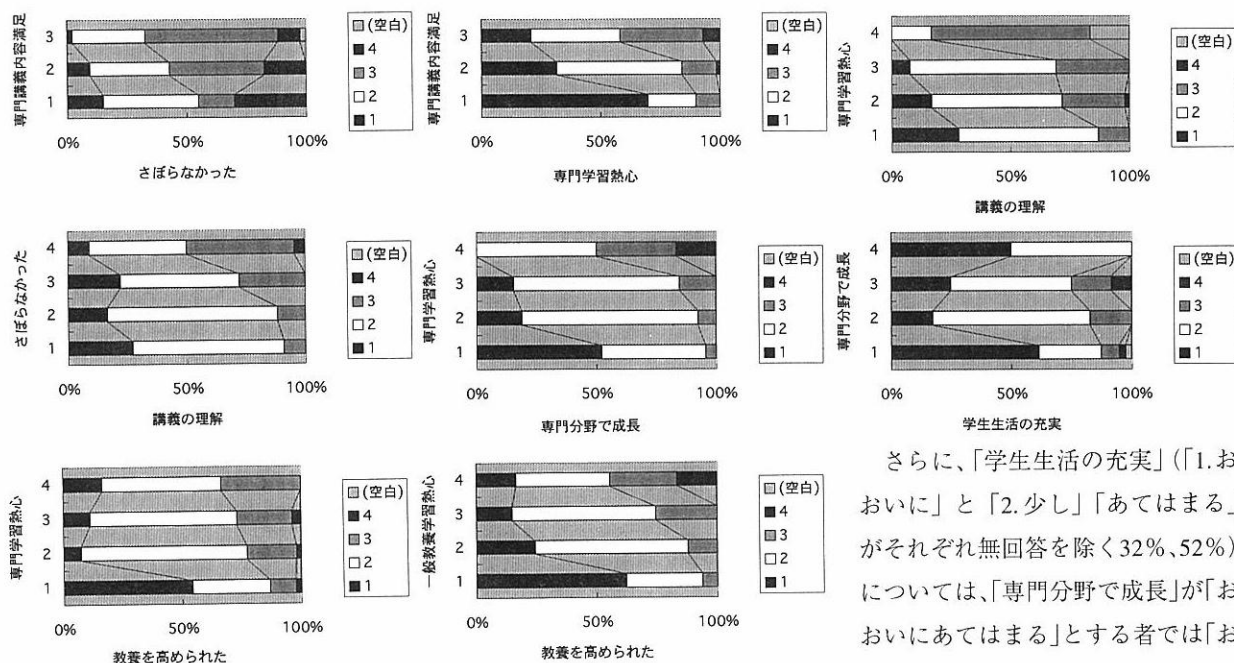


図3-3 専門講義内容と講義の理解および自己達成感

向の強いことがわかる。

2) 講義の理解 (図3-3 参照)

「講義の理解」については、総計で「1. おおいに」と「2. 少し」「あてはまる」はそれぞれ無回答を除く合計の18%、56%を占める。「講義の理解」は授業態度に影響されよう。前段落で述べたとおり、専門講義内容の満足度が「さばらなかつた」「専門分野学習熱心」という授業態度に正の相関を持っていることから、まずこれら両者と「講義の理解」の関係を検討する。

「専門分野学習熱心」では「1. おおいに」熱心な者の28%が講義をおおいに理解し、59%が少し理解しているのに対し、「2. 少し」熱心な者は、それぞれ、17%、55%など「講義の理解」と明白に正の相関を示している。また、「さばらなかつた」も、「講義の理解」の「おおいに」のみではやや逆転もあるが、「少し」を合わせた「講義の理解」を見ると、なめらかに理解の比率が推移している。

3) 自己達成感と学生生活充実感 (図3-3 参照)

「専門分野で成長」については、「1. おおいに」と「2. 少し」「あてはまる」がそれぞれ無回答を除く回答者の29%、60%で、「3. あまりあてはまらない」が9%である。「専門分野学習熱心」と正の相関が見られ、特に「おおいに」熱心だった者は「おおいに」成長したとする者が5割を超えている。

さらに、「学生生活の充実」(「1. おおいに」と「2. 少し」「あてはまる」がそれぞれ無回答を除く32%、52%)については、「専門分野で成長」が「おおいにあてはまる」とする者では「おおいに」「学生生活の充実」している比率が高く約6割ある。「学生生活の

充実」が「おおいに」と「少し」を合わせた割合では、「専門分野で成長」と正の相関があるけれども、「おおいに」充実の場合のみでは、絶対数としては少ないが負の関係も見られ、「専門分野で成長」とは相関しない他の要因による、「学生生活の充実」を示唆する。

「専門分野で成長」が、「専門分野学習熱心」によってもたらされているのであれば、「教養を高められた」(「1. おおいに」と「2. 少し」「あてはまる」がそれぞれ無回答を除く25%、54%)についてはどうであろうか。はじめに「専門分野学習熱心」との関係を見ると、「おおいに熱心」な場合、「おおいに教養を高められた」が5割を超えるが、「少し熱心」から「あまり熱心でなかった」、「まったく熱心でなかった」となるに連れて、「おおいに教養を高められた」とする比率が増加する逆転が見られる。「おおいに」と「少し」を合わせて「教養を高められた」場合では、ほぼ正の相関が見られる。これに対して、「一般教養学習熱心」(「1. おおいに」と「2. 少し」「あてはまる」がそれぞれ無回答を除く12%、38%)については、「おおいに熱心」な場合、「おおいに教養を高められた」が6割を超え、一部逆転も見られるが、概ね正の相関といえる。また、「おおいに」と「少し」を合わせて「教養を高められた」場合では、「専門分野学習熱心」の場合よりもはっきりした正の相関が見られる。これらから、専門も教養もおおいに熱心に学習し、教養を高め

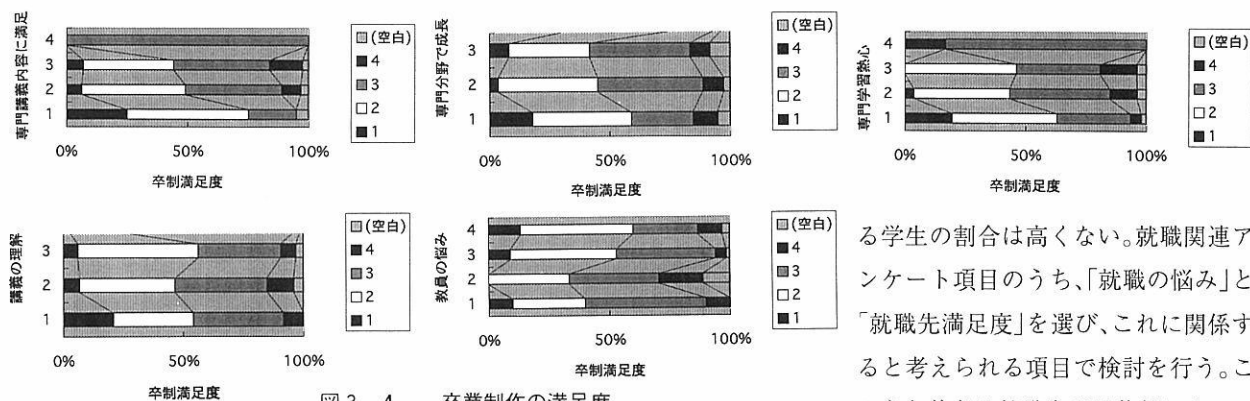


図 3 - 4 卒業制作の満足度

られた学生の存在と、専門は熱心でないが教養は熱心で教養を高められた学生、両者とも熱心ではないが少しは教養を高められたとする多くの学生の存在が確認できる。因みに、「おおいに」と「少し」を合わせて「教養を高められた」者の割合は、無回答を除く合計の約79%（「おおいに」が約25%）もあるが、因に「専門分野で成長」した者の割合はさらに多く、無回答を除く総数の約90%（「おおいに」が約29%）となっている。

4)卒業制作（図3-4 参照）

「卒業制作の満足度」は、「1.おおいに」と「2.少し」あてはまる者が、それぞれ無回答を除く9%、43%であり、自己達成感、学生生活の充実感に比べると満足度は低い。この満足度に影響すると考えられる、「教員の悩み」、「講義の理解」、「専門分野学習熱心」、「専門分野で成長」、「専門講義内容の満足」との関係を検討する。

このなかでは、「専門講義内容の満足」に、正の相関が強く、「専門分野で成長」、「専門分野学習熱心」に弱い相関が見られた。「講義の理解」の3段階によって卒業制作の満足度が「1.おおいに」あてはまる者の率に差はあるものの、全体として「講義の理解」と卒業制作の満足度に関連性は見られない。また一部逆転もあるが、「教員の悩み」があてはまらないほど、「卒業制作の満足度」が「大いに」「少し」あてはまる傾向も見られ、逆に「教員の悩み」が「少し」あてはまる場合に、「卒業制作の満足度」が最も低くなっている。

（3）就職

卒業後の進路としては、無回答を除き、「就職」43%、「個人で専門職をめざす」11%、「進学」24%、「未定」22%と、アンケート時で就職を決めてい

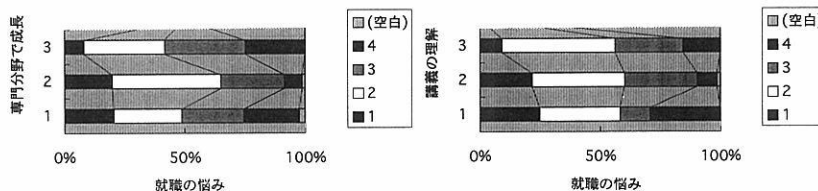


図 3 - 5 就職の悩み

る学生の割合は高くない。就職関連アンケート項目のうち、「就職の悩み」と「就職先満足度」を選び、これに関連すると考えられる項目で検討を行う。このうち後者は就職先が具体的に

いないと答えられないため、無回答の割合が多い。

1)「就職の悩み」（図3-5 参照）

「就職の悩み」については、「1.おおいに」と「2.少し」あてはまるが、それぞれ無回答を除く20%、39%で、「3.あまり」と「4.まったく」あてはまらないが、27%、15%となっている。これに対して「専門分野で成長」との関係では、数は少ないが、「あまり」成長にあてはまらない者で就職の悩みが小さく、「少し」成長にあてはまる者で就職の悩みが大きい。

「講義の理解」については、理解度の大きい者ほどおおいに就職の悩みを持っている割合が高いと同時に、ほとんど悩んでいない者の割合も多い。

2)就職先満足度（図3-6 参照）

「就職先満足度」については、無回答率が64%にもなる。「1.おおいに」と「2.少し」あてはまるが、それぞれ無回答を除く25%、58%で、「3.あまり」と「4.まったく」あてはまらないが、8%、9%となっている。授業態度や自己達成感など学生生活のどのあたりと関連して、学生達は就職先に満足感を持てるのか確認する意味で、いくつかの項目との関連を検討する。検討する関連項目は、「講義の理解」、「専門分野で成長」、「学生生活の充実」、「クラブへの参加」、「勉学の悩み」、「チュートリアルへの参加」である。なお、無回答のところは就職先が確定していないものと考え、無回答が少ないほど、就職の決定が早かったと考えて考察をしている。

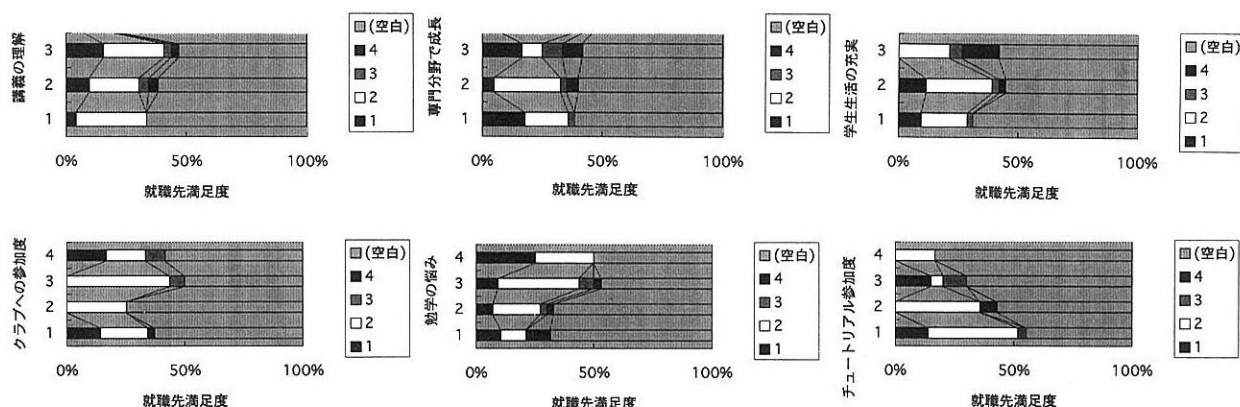


図 3 - 6 就職先の満足度

これらのうち前 4 者は、正の相関が見られず、「講義の理解」とはむしろ負の相関が見られる。ただし、「専門分野で成長」と「学生生活の充実」では「1. おおいに」「2. 少し」「あてはまる」、「3. あまりあてはまらない」となるに従い、就職先の不満が多くなっている。また、「クラブへの参加度」については無回答にばらつきがあり分かりにくい、就職先満足度における関連は見つけ難い。

「勉学の悩み」とはかなり負の相関、すなわち「勉学の悩み」があてはまらないほど就職も早く、就職先に満足度の比率が大きい。また、チュートリアルへの参加度が頻繁なほど、就職も早く、「おおいに」と「少し」を合わせた就職満足度が高くなる明瞭な傾向を示した。

これから、「就職先満足度」は、学業の成果ないしは達成度などとの関連は明白ではないものの、勉学の悩みがない方が就職の決定が早く、学生生活の充実、専門分野での成長などが就職先に不満を持たないことにつながる。また、チュートリアルに熱心に参加している者の方が、就職も早く満足度も高い傾向も見られた。

(4) 入学意思と学業等学生生活のまとめ

入学意思が、「1. 本学に入りたかった」、「2. 他の大学へ」、「3. どこでも良かった」となるに従い、どの項目でも無回答が多くなり、アンケート自体に消極的である傾向が見られた。学業態度は、学生生活の出発点である、クラブやチュートリアルへの参加に積極性で差がつくものの、それほど大きな差ではない。やがて、学業が本格化し、専門科目が始まると、教員の悩み、勉学の悩み、転部、転科、コース変更、退学の危機などが起こりうる。この時点で、他大学志望だった学生は、やや他の意思の学生よりも悩む傾向にある。授業態度は、専門講義内容

によるところが大きく、これに満足する学生は、授業態度が良い傾向を示す。他大学を志望していた学生は、専門講義の満足度が他の意思の学生より低く、授業態度は全般的に最も良くない傾向である。これに対してどこでも良かった学生は、専門講義の満足度が高く、本学に入りたかった学生は、「おおいに」満足が多いため、授業態度も総じて良い。しかし、入学意思 2 だった学生は、一般教養学習熱心度が他の類型学生より低いものの、専門科目の学習熱心度は高い。これはその後の学業の深化にともなう自己達成感にも現われ、入学意思 2 だった学生の「専門分野で成長」での達成感が高い。「教養を高められた」についてはこの意思の学生の達成感は低く、入学意思 2 は専門系を重視する傾向の学生に多いものと想定される。

最終学年に学業の最終成果である卒業制作と就職が待ち受けている。卒業制作では、すでに入学意思における差は小さく、むしろ、卒業制作の満足度は、本学に入りたかった学生を、他の 2 意思の学生が上回っている。一方、就職に関しては、学業の成果ないしは達成度などとの関連は明白ではないものの、勉学の悩みのないことやチュートリアル活動の積極さにおいて、本学に入りたかった学生が優り、就職の決定、就職先の満足度に優れる傾向になっている。

4. 海外旅行及び地域・他大学との交流

I 海外旅行に関する調査

平成8年度版観光白書によれば、平成7年度の我が国の海外旅行者数は約1,250万人で、国民の12.2%、8人に1人が海外旅行に出かけている。円高の進行によって、海外旅行は非常に身近なものになっている。

ここでは、学生の学外でのアクティビティの1側面を、海外旅行体験の実態から捉えてみようとするものである。もちろん、海外旅行の体験から直接的に学生のアクティビティを計れるものではないが、その傾向は間接的に示されていると思われる。

(1) 学生の海外旅行体験の分析と考察

1) 旅行者数

表4-1は本調査による海外旅行体験者の割合を示している。無回答を含めて15.6%、無回答を含めないと16.3%が海外旅行を1回以上体験している。7人に1人が体験していることになる。(以下、無回答を含めない)山形県の昨年の海外旅行者数は約12万人、10人に1人の割合と推定され¹⁾、学生平均は、山形平均、全国平均を上回っている。

表4-1 本校学生の渡航割合(体験率)

	回答数	構成割合	構成割合
旅行した	137	15.6	16.3
旅行しなかった	704	80.3	83.7
無回答	36	4.1	-

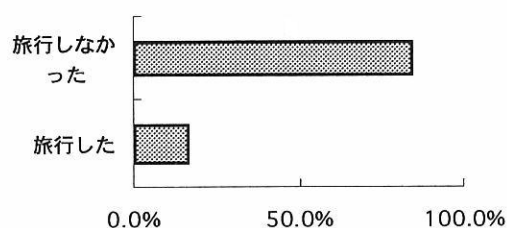


図4-1 本校学生の渡航割合(体験率)

表4-2は学科別にみたものである。芸術の体験率(渡航割合)が最も高く37.5%、ついで美術である。以下、環境、情報、生産と続く。芸術と美術が高く、生産、環境、情報とは隔たりがある。

表4-2 学科別海外旅行体験と推定体験者数

	実数 体験あり	学科別体験率	推定値 体験あり	学科学籍者数
全学	136	16.3%	225	1492
芸術	24	37.5%	38	100
美術	60	22.3%	84	376
生産	11	8.6%	22	256
環境	18	13.5%	33	247
情報	23	9.3%	48	513

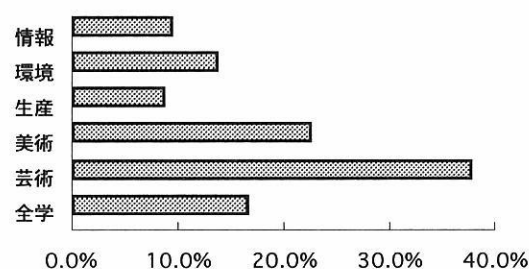


図4-2 学科別海外旅行体験(体験率)

表4-3は学年別にみたものである。学年が進むに従い渡航者の割合が高くなっている。1年生の段階では全国平均を下回って3.4%であるが、2年生ではほぼ全国平均値を示し、3年生、4年生では30%前後、3人に1人が渡航を体験している。3年生、4年生では全国平均を大幅に上回っている。

表4-3 学年別海外旅行体験

	学年別参加割合	旅行体験者(実数)
1年生	3.4%	11
2年生	12.6%	33
3年生	33.6%	47
4年生	29.9%	46

2) 渡航先

表4-4は旅行先を示している。ヨーロッパ・ロシアが高い(37.4%)。以下、東南・東アジア、北アメリカ、ハワイ・太平洋と続いている。ヨーロッパ・アジア

が高くなっている点は特記すべである。

表 4-4 海外旅行先

	ヨーロッパ・ロシア	東南・東アジア	北アメリカ	ハワイ・太平洋	他のアジア	オセアニア	中央・南アメリカ	アフリカ	その他	合計
全学	61	32	23	18	12	9	7	1	0	137
構成比	37.4%	19.6%	14.1%	11.0%	7.4%	5.5%	4.3%	0.6%	0.0%	100.0%

表 4-5 は我が国の海外旅行者の渡航先と学生の渡航先を比較したものである。これから、明らかに学生はヨーロッパ・ロシアの指向が強いことがわかる。アジア、米国・北アメリカは全国平均を下回っており、特に、アジアは半分以下である。オセアニアには差異は見られない。

表 4-5 我が国の海外旅行者（平成 5～7 年）と学生の渡航先の比較

	平成 5 年	平成 6 年	平成 7 年	本校学生
ヨーロッパ・ロシア	10.4%	10.6%	10.6%	37.4%
東南・東アジア	46.6%	46.9%	45.5%	19.6%
北アメリカ・ハワイ・太平洋	36.5%	36.1%	37.8%	25.1% (14.1%+11.0%)
オセアニア	6.6%	6.4%	6.1%	5.5%
その他の地域	0.0%	0.0%	0.0%	12.9%

注) 平成 5 年～7 年のデータは我が国の海外旅行者の渡航先構成比である。数字は全渡航者を対象にしたものではなく、旅行者数ベースで渡航先上位 94% の渡航先のみを対象にし、渡航者数構成比を示している。また、統計データの都合上、北アメリカと太平洋マリアナは統合している。

表 4-6 は学科別に旅行先をみたものである。第 1 位は全学科ヨーロッパ・ロシアである。芸術は半数以上がヨーロッパに行っている。生産、美術もヨーロッパが高い。

第 2 位は学科によって異なる。芸術と美術は東南・東アジアへ、生産は北アメリカ、ハワイ・太平洋地域、環境と情報は分散している。

3) 旅行目的

表 4-7 は旅行の目的をまとめたものである。遺跡・芸術の鑑賞と観光の目的で渡航するものが多い。そのなかで、旅行目的の 10% 程度がショートステイを目的としていることは注目すべきであろう。

表 4-8 は学科別にみたものである。芸術、美術、生産では遺跡・芸術鑑賞が第 1 位の目的になっているのに対し、環境、情報では観光が第 1 位である。ショートステイについては芸術、美術、環境で 10% を越えている。ワーキングホリディやボランティアなどはゼロであった。

表 4-6 学科別海外旅行先（上段：実数、下段：構成比）

	ヨーロッパ・ロシア	東南・東アジア	北アメリカ	ハワイ・太平洋	他のアジア	オセアニア	中央・南アメリカ	アフリカ	その他
芸術	19	8	2	1	1	1	1	0	0
	57.6%	24.2%	6.1%	3.0%	3.0%	3.0%	3.0%	0.0%	0.0%
美術	24	13	12	5	4	2	5	1	0
	36.4%	19.7%	18.2%	7.6%	6.1%	3.0%	7.6%	1.5%	0.0%
生産	6	1	2	2	1	1	0	0	0
	46.2%	7.7%	15.4%	15.4%	7.7%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%
環境	5	3	1	4	3	3	0	0	0
	26.3%	15.8%	5.3%	21.1%	15.8%	15.8%	0.0%	0.0%	0.0%
情報	7	7	6	6	3	2	1	0	0
	21.9%	21.9%	18.8%	18.8%	9.4%	6.3%	3.1%	0.0%	0.0%

表 4-7 旅行目的（上段：実数、下段：構成比）

	遺跡・芸術鑑賞	観光	ショートステイ	家族・知人の訪問	ワーキングホリディ	ボランティア	その他
全学	71	62	19	17	0	0	16
	38.4%	33.5%	10.3%	9.2%	0.0%	0.0%	8.6%

表 4-8 学科別旅行目的 (上段:実数、下段:構成比)

	遺跡・ 芸術鑑賞	観光	ショ- ートステイ	家族・ 知人の 訪問	ワーキ ングホ リディ	ボラン ティア	その他
芸術	19	10	5	2	0	0	2
	50.0%	26.3%	13.2%	5.3%	0.0%	0.0%	5.3%
美術	32	28	9	8	0	0	4
	39.5%	34.6%	11.1%	9.9%	0.0%	0.0%	4.9%
生産	6	5	1	3	0	0	0
	40.0%	33.3%	6.7%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%
環境	6	7	2	2	0	0	3
	30.0%	35.0%	10.0%	10.0%	0.0%	0.0%	15.0%
情報	8	12	2	2	0	0	7
	25.8%	38.7%	6.5%	6.5%	0.0%	0.0%	22.6%

表 4-9 は学年別にみたものである。1 年生では観光目的のものが最も多い。学年が進むに従い、海外旅行体験は増加するとともに、遺跡・芸術鑑賞の割合が増える。ショートステイは実数で増えるものの構成比では減少してくる。

表 4-9 学年別渡航目的 (上段:実数、下段:構成比)

	観光	遺跡・ 芸術鑑賞	ショ- ートステイ	家族・ 知人の 訪問	ワーキ ングホ リディ	ボラン ティア	その他
1 年生	8	4	2	0	0	0	0
	57.1%	28.6%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2 年生	15	15	5	5	0	0	6
	32.6%	32.6%	10.9%	10.9%	0.0%	0.0%	13.0%
3 年生	18	25	8	7	0	0	7
	27.7%	38.5%	12.3%	10.8%	0.0%	0.0%	10.8%
4 年生	22	27	4	5	0	0	3
	36.1%	44.3%	6.6%	8.2%	0.0%	0.0%	4.9%

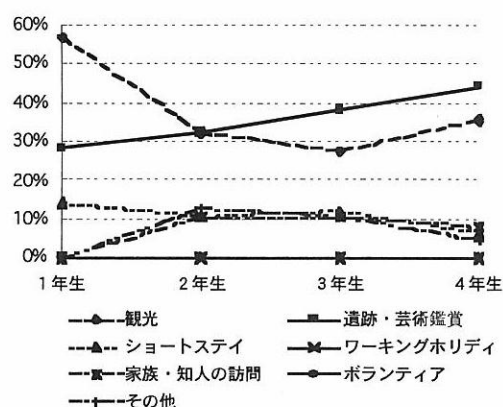


図 4-3 渡航先の学年変化

4) 旅行形態

表 4-10 は海外旅行の参加形態をみたものである。40%以上が個人旅行で、ついでサークル・チュートリアルを通じてであり、旅行代理店の企画したパック旅行は 21.4%であった。最近では個人向けパック旅行も多いことを付記しておく。

表 4-10 海外旅行の参加形態 (上段:実数、下段:構成比)

	個人	サークル・チュ- ートリアル	旅行代理 店企画	学会企画	授業の一 環	その他
全学	59	35	30	7	9	0
	42.1%	25.0%	21.4%	5.0%	6.4%	0.0%

表 4-11 学科別旅行形態 (上段:実数、下段:構成比)

	個人	サークル・チュ- ートリアル	旅行代理 店企画	学会企画	授業の一 環	その他
芸術	9	5	7	1	5	3
	30.0%	16.7%	23.3%	3.3%	16.7%	10.0%
美術	26	18	11	5	3	2
	40.0%	27.7%	16.9%	7.7%	4.6%	3.1%
生産	5	3	1	0	0	2
	45.5%	27.3%	9.1%	0.0%	0.0%	18.2%
環境	8	5	3	1	0	1
	44.4%	27.8%	16.7%	5.6%	0.0%	5.6%
情報	10	4	8	0	1	1
	41.7%	16.7%	33.3%	0.0%	4.2%	4.2%

表 4-11 は学科別にみている。

表 4-12 は学年別にみている。学年が進むにつれ、

サークル・チュートリアル、授業の一環が増えてくる。しかし、それ以上に全数が増加し、個人、旅行代理店企画なども参加数は1年に比べ3倍近く増えている。

表4-12 学年別旅行形態（上段：実数、下段：構成比）

	個人	サークル・チュートリアル	旅行代理店企画	学会企画	授業の一環	その他
1年生	7	0	3	0	0	0
	70.0%	0.0%	30.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2年生	12	9	10	3	1	0
	34.3%	25.7%	28.6%	8.6%	2.9%	0.0%
3年生	23	13	7	1	2	0
	50.0%	28.3%	15.2%	2.2%	4.3%	0.0%
4年生	17	13	10	3	6	0
	34.7%	26.5%	20.4%	6.1%	12.2%	0.0%

5) 海外旅行の評価

表4-13は学科別海外旅行評価を示している。非常に高い満足度を得ていると考えて良いであろう。多分、一般旅行者を上回った評価になっているのではないだろうか。

表4-13 学科別海外旅行評価（上段：実数、下段：構成比）

	とても満足	まあ満足	満足合計	あまり満足でない	不満	その他
芸術	15	5	20	1	1	2
	62.5%	20.8%	83.3%	4.2%	4.2%	8.3%
美術	37	17	54	4	0	2
	61.7%	28.3%	90.0%	6.7%	0.0%	3.3%
生産	6	4	10	1	0	0
	54.5%	36.4%	90.9%	9.1%	0.0%	0.0%
環境	11	7	18	0	0	0
	61.1%	38.9%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
情報	13	8	21	0	0	2
	56.5%	34.8%	91.3%	0.0%	0.0%	8.7%

表4-14は、海外旅行体験者が海外旅行を学生時代に体験すべきかどうかを尋ねた結果である。「是非行くべき」「なるべく行くべき」をあわせると、前表と同様非常に高い割合で、学生時代の海外旅行を薦めている。特に、満足度評価では「まあ満足」「あまり満足でない」と答えた者も、「是非行くべき」あるいは「なるべく行くべき」と考えていることがわかる。

「なるべく行くべき」を合わせると、前表と同様非常に高い割合で、学生時代の海外旅行を薦めている。特に、満足度評価では「まあ満足」「あまり満足でない」と答えた者も、「是非行くべき」あるいは「なるべく行くべき」と考えていることがわかる。

表4-14 学科別海外旅行の薦め（上段：実数、下段：構成比）

	是非行くべき	なるべく行くべき	行くべき合計	社会に出てからでよい	わからない	その他
芸術	16	4	20	1	2	1
	66.7%	16.7%	83.3%	4.2%	8.3%	4.2%
美術	36	15	51	1	5	3
	60.0%	25.0%	85.0%	1.7%	8.3%	5.0%
生産	8	2	10	0	1	0
	72.7%	18.2%	90.9%	0.0%	9.1%	0.0%
環境	14	2	16	2	0	0
	77.8%	11.1%	88.9%	11.1%	0.0%	0.0%
情報	16	5	21	2	1	0
	66.7%	20.8%	87.5%	8.3%	4.2%	0.0%

（2）海外旅行に関するまとめ

学年が進むにつれ、海外旅行をする者が大幅に増え、1年生では日本人の全国平均を下回っているものの、2年生ではほぼ全国平均に達し、3年生、4年生では全国平均を大幅に上回っている。東京や大阪の学生に比べ海外に出にくい山形というハンデを負いながら、積極的に海外旅行をしていると言えよう。非常に高いアクティビティを学生は持っていると言って良いであろう。しかも、自分自身で計画した海外旅行計画に大いに満足している。

この学生のアクティビティの高さの要因には、遺跡・芸術鑑賞の目的で渡航するものが多いように、観光目的にしる遺跡・芸術鑑賞にしる、明確な目的をもっていることが挙げられる。これは渡航先にヨーロッパ・ロシアを指向していることにも現れているのだろう。また、チュートリアルや授業の一環でも行われていることも、全体に海外旅行を指向させる要因にもなっていると思われる。

学生が学生時代のうちに数多くの外国を自分の目で見るとは、地球の小さくなった今日ますます重要なこと

になっていると思う。今日、我が国は経済的に成熟し、閉塞感の漂う状況にあると言われている中で、我が国では感じることでできない、生きる人々の活力・エネルギーや生き様を目に焼き付けることや、長い歴史の中で育まれたさまざまな民族の文化を理解することは、若い時代に経験しておきたことである。

学生の貧乏旅行といえ海外旅行は学生にとって決して廉価なものではない。しかし、より多くの学生が1度と言わず、何度も自分の足で海外をみてまわって欲しいものである。我が学生にはより多く海外旅行（滞在）を経験してもらいたい。また、20世紀世界を作った米国や我が国の近隣諸国であるアジアの各国にも足を向けて欲しい。

II 学生の地域・他大学との交流に関する調査

本章は、学生の学外でのアクティビティの1側面を大学周辺の地域社会、地域住民、地域企業、行政、他の大学などとの関わりから捉えてみようとするものである。本学は山形県と山形市によって設立された大学であり、また山形県・山形市で2番目の4年制大学で、唯一の芸術系学部を持つ大学として、地域では積極的な関わりを期待している。そうした土壌にある本学、本学生がどう地域と関わっているか、その実態を明らかにしながら、本学生のアクティビティを見てみようとするものである。地域との交流、他大学との交流と分けてみていく。

（3）地域との交流の現状と考察

1) 交流の現状

地域との交流状況は全学生で見ると、ほぼ3人に1人が何らかの関わりをもっていると答えている（表4-15）。

表4-15 全学の地域交流率

	ある	ない
全学	268	585
	31.4%	68.6%

注) 表4-15、表4-16と表4-17で全学年の総数が異なる。これはそれぞれの有効回答数が異なるために起こっている。それぞれ無効回答は含めていない。

表4-16は学科別にみたものである。交流率が高い学科は環境の45.0%と美術36.6%である。その他の学科も31.7%から21.7%と高い。

表4-17は学年別にまとめたものである。1年生の交流率は18.9%である。学年の進行とともに増加し、4年生では約半数の49.6%に達している。

次に交流の形式をみる。表4-18は学科毎に尋ねた結果である。各学科とも地域のイベントに参加したものが最も多い。30%~40%に達している。それに続いて、ボランティアとしての交流や、企業への作品などの展示、イベントの企画などとなっている。ただし、行政との交流はそれほど多くない。

表4-16 学科別地域交流率

（上段はアンケート回答実数、下段は学科交流率）

	ある	ない	構成比
芸術	20	43	6.7%
	31.7%	68.3%	
美術	96	166	28.9%
	36.6%	63.4%	
生産	36	91	15.2%
	28.3%	61.7%	
環境	59	72	23.4%
	45.0%	55.0%	
情報	53	191	23.4%
	21.7%	78.3%	

注) 表4-15、表4-16と表4-17で全学年の総数が異なる。これはそれぞれの有効回答数が異なるために起こっている。それぞれ無効回答は含めていない。

学科間で全体の傾向には、それほど差はないが、交流率の高い美術と環境では、美術で企業への作品展示が高く、他の学科を圧倒しており、環境ではイベント企画が高くなっている。このあたりが、両学科の交流率を押し上げていると思われる。

表 4－17 学年別地域交流率
(上段はアンケート回答実数、下段は学科交流率)

地域との交流	ある	ない
1 年生	59	257
	18.7%	81.3%
2 年生	82	179
	31.4%	68.6%
3 年生	58	79
	42.3%	57.7%
4 年生	69	70
	49.6%	50.4%

注) 表 4－15、表 4－16 と表 4－17 で全学年の総数が異なる。
これはそれぞれの有効回答数が異なるために起こっている。
それぞれ無効回答は含めていない。

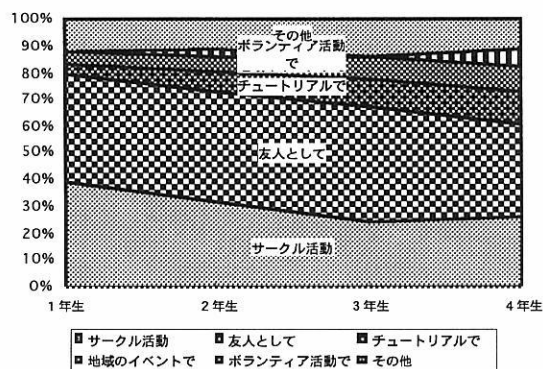


図 4－4 地域交流の形態の学年変化

表 4－19、図 4－4 は学年別に地域の交流形式をみている。イベントへの参加による交流は学年を問わず全体に40%前後の参加率があり、地域との交流が積極的に行われていることが伺える。全体として、学年が進むにつれ行政や企業との関わりが出てくる傾向にある。イベントへの参加やボランティアの参加、企業への作品展示などの他の交流形式では学年間のばらつきが大きく特定の傾向を見ることはできない。

表 4－18 学科別地域交流の形式
(上段はアンケート回答実数、下段は学科内構成比)

地域	イベントへの参加	ボランティアに参加	企業への作品展示	イベントの企画	企業からの委託	行政からの委託	行政の勉強会に参加	企業の勉強会に参加	その他
全学	141	35	34	29	22	15	13	3	55
	40.6%	10.1%	9.8%	8.4%	6.3%	4.3%	3.7%	0.9%	15.9%
芸術	8	4	0	3	0	1	3	0	7
	30.8%	15.4%	0.0%	11.5%	0.0%	3.8%	11.5%	0.0%	26.9%
美術	59	17	25	11	8	3	1	2	10
	43.4%	12.5%	18.4%	8.1%	5.9%	2.2%	0.7%	1.5%	7.4%
生産	19	4	2	3	5	3	2	1	11
	38.0%	8.0%	4.0%	6.0%	10.0%	6.0%	4.0%	2.0%	22.0%
環境	26	3	2	7	4	4	4	0	17
	38.8%	4.5%	3.0%	10.4%	6.0%	6.0%	6.0%	0.0%	25.4%
情報	29	7	5	5	5	4	3	0	10
	42.6%	10.3%	7.4%	7.4%	7.4%	5.9%	4.4%	0.0%	14.7%

表 4－19 学年別地域交流の形式
(上段はアンケート回答実数、下段は学科内構成比)

地域	イベントへの参加	ボランティアに参加	企業への作品展示	イベントの企画	企業からの委託	行政からの委託	行政の勉強会に参加	企業の勉強会に参加	その他
全学	153	35	36	31	22	17	13	3	55
	41.9%	9.6%	9.9%	8.5%	6.0%	4.7%	3.6%	0.8%	15.1%
1 年生	26	9	8	5	2	2	2	0	15
	37.7%	13.0%	11.6%	7.2%	2.9%	2.9%	2.9%	0.0%	21.7%
2 年生	48	3	6	9	4	2	5	1	19
	49.5%	3.1%	6.2%	9.3%	4.1%	2.1%	5.2%	1.0%	19.6%
3 年生	41	10	10	6	9	5	3	0	10
	43.6%	10.6%	10.6%	6.4%	9.6%	5.3%	3.2%	0.0%	10.6%
4 年生	38	13	12	11	7	8	3	2	11
	36.2%	12.4%	11.4%	10.5%	6.7%	7.6%	2.9%	1.9%	10.5%

(4) 他大学との交流の現状と考察

表 4－20は他大学との交流の状況をみたものである。
ほぼ 3 分の 1 が他大学との交流を持っている。

表 4－20 全学の他大学交流率
(上段はアンケート回答実数、下段は学科交流率)

	ある	ない
全学	307	531
	36.6%	63.4%

表 4－21は学科別にみたものである。芸術の学生では約半数が交流している。全学生を対象にした構成比は表 4－21の右の欄にあるとおりである。

表 4－22は学年別にみたものである。地域との交流と同様に学年の進行とともに参加割合が高くなる。4 年生ではほぼ半数に達していることも同じである。ただし、1 年生の時点の交流率は、地域との交流が18.6%であったのに対し、32.6%と高い。

表 4－23は学科別の交流形式を示している。各学科ともに、友人として、あるいはサークル活動を通じて、という 2 つの形式で交流が行われている。チュートリアルを通じて、地域のイベントを通じて、ボランティアで、というものは少ない。ただし、芸術、美術ではチュートリアルや地域のイベントを通じた形も多少目立つ。チュートリアルやサークルの活動については本報告のそれぞれの項を参照して欲しい。

4－21 学科別他大学交流率
(上段はアンケート回答実数、下段は学科交流率)

	ある	ない	構成比
芸術	31	32	8.9%
	49.2%	50.8%	
美術	98	161	25.8%
	37.8%	62.2%	
生産	41	86	15.0%
	32.3%	67.7%	
環境	48	77	17.2%
	38.4%	61.6%	
情報	83	157	32.2%
	34.6%	65.4%	

表 4－22 学年別他大学交流率
(上段はアンケート回答実数、下段は学科内構成比)

	ある	ない
1 年生	100	207
	32.6%	67.4%
2 年生	86	174
	33.1%	66.9%
3 年生	57	77
	42.5%	57.5%
4 年生	64	73
	46.7%	53.3%

表 4－23 学科別他大学交流形式
(上段はアンケート回答実数、下段は学科内構成比)

他大学	友人として	サークル活動	チュートリアルで	地域のイベントで	ボランティア活動で	その他
全学	138	112	30	23	9	43
	38.9%	31.5%	8.5%	6.5%	2.5%	12.1%
芸術	15	11	6	4	0	6
	35.7%	26.2%	14.3%	9.5%	0.0%	14.3%
美術	42	30	13	10	3	12
	38.2%	27.3%	11.8%	9.1%	2.7%	10.9%
生産	24	15	3	1	1	5
	49.0%	30.6%	6.1%	2.0%	2.0%	10.2%
環境	17	18	5	3	5	10
	29.3%	31.0%	8.6%	5.2%	8.6%	17.2%
情報	40	38	3	5	0	10
	41.7%	39.6%	3.1%	5.2%	0.0%	10.4%

表 4－24、図 4－5 は学年別にみたものである。サークル活動や友人としての交流は学年間の差異は見られない。各学年、一定の割合で交流が行われている。ただ、チュートリアルや地域のイベントを通じた交流は学年が進行するに従い増えてくる。

表 4－24 学年別他大学との交流形式
(上段はアンケート回答実数、下段は学科内構成比)

	サークル活動	友人として	チュートリアルで	地域のイベントで	ボランティア活動で	その他
全学	112 31.0%	143 39.6%	30 8.3%	23 6.4%	9 2.5%	44 12.2%
1年生	42 39.3%	42 39.3%	5 4.7%	5 4.7%	0 0.0%	13 12.1%
2年生	32 31.1%	43 41.7%	8 7.8%	5 4.9%	3 2.9%	12 11.7%
3年生	17 24.3%	30 42.9%	7 10.0%	6 8.6%	0 0.0%	10 14.3%
4年生	21 25.9%	28 34.6%	10 12.3%	7 8.6%	6 7.4%	9 11.1%

註

1) 山形県の海外渡航者数の推計について

山形市の海外旅行者数は、全国の渡航者総数に山形県の全に対する旅券申請者割合をかけて算定した。

参考文献

1) 総理府編、平成 8 年度観光白書、大蔵省印刷局、平成 8 年 7 月

2) 山形県企画調整部、山形県統計年鑑、山形県統計協会、平成 7 年 12 月

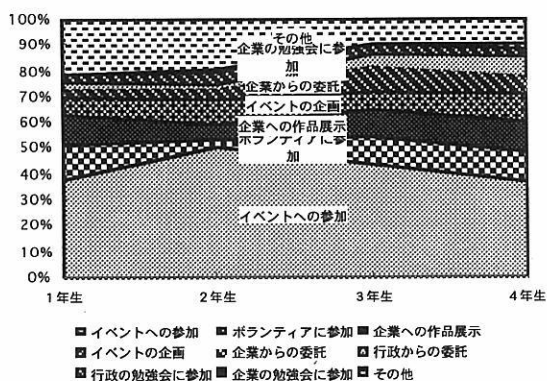


図 4－5 他大学交流の形態の学年変化

(5) 地域・他大学との交流のまとめ

地域との交流では、かなり積極的である。特に、美術・環境で積極的に行われている。学科の特性が活かされていると言えよう。他の学科でも今後それぞれのスタイルで積極的な行われることを期待したい。また、ボランティアでの関わりが少なく、もう少し視野を広げて、地域で活動することを願う。

他大学との交流については、比較データがないが決して低いレベルではないと思われる。サークルなどの活動を通じたり、さまざまな形で他大学に友人がいるケースは決して珍しくなく、広い友人関係を構築している学生が多数存在していることが伺える。

5. 第一期卒業生の進路動向

(1) 分析の前に

日頃様々な分野でその特徴や可能性を発揮している学生達。卒業後も自分の可能性を最大限に引き出し目標に向かって進んで行ってほしいものである。デザイン工学部と芸術学部、同年代の学生でも専攻により仕事への考え方や目標、価値観が異なるのは当然であるが、ここでは第一期卒業生の進路動向を芸術学部を中心としてデザイン工学部と比較しながら学生達の進路について考察する。平成8年1月に4年生を対象に実施された学生意識調査の中から進路動向の部分を取り出し分析した。

(2) 進路動向の考察

全国的美術系大学では従来はデザイン系は就職、芸術系は作家を目指すと言うのが一般的であったが最近のいろいろな情報を聞くと芸術系でも就職をする学生が増えているという。作家として独り立ちし仕事を続けていく事の厳しさはもちろんであるが、就職においても今の不景気では厳しい事は明らかである。

図5-1を見ると本学でもデザイン工学部は就職をする学生が圧倒的に多く68.3%を占めている。芸術学部ではやはり専門職（作家、研究者）を目指す学生がいるが、就職、進学、未定とどれも大差がない。進学の割合がデザイン工学部と比較すると高いが、これはほとんどの場合専門職を目指す学生がその分野の不足している知識や技術、表現力をもっと学ぼうとして大学院や研究生、ま

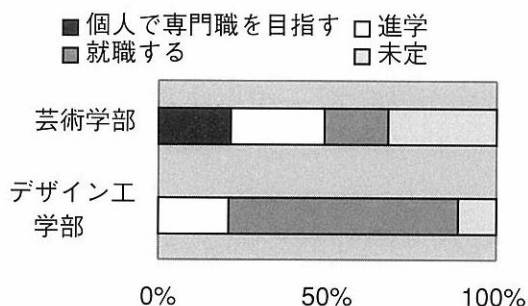


図5-1 卒業後の進路

た他の教育機関に進学するためである。これらの学生達がゆくゆくは専門職を目指す可能性もあると考えると、その割合はもっと高くなる。

また芸術学部では未定の割合が高いがこの中にも実際は専門職を目指したいと考えている学生も少なくない。これらの学生達は将来の自立や、どうすれば専門職を続けていく事が出来るかなど様々な不安を抱えている。事実そのような相談を持ち込む学生も多い。その気持ちの現われが32.3%の未定という回答に出ているのではないだろうか。

デザイン工学部では専門職を目指す項目には該当者がいなかったが、就職した後将来独立するという場合もあることだろう。以上の様なことから全体を見ると両学部の特徴がよく現われた結果となっている。

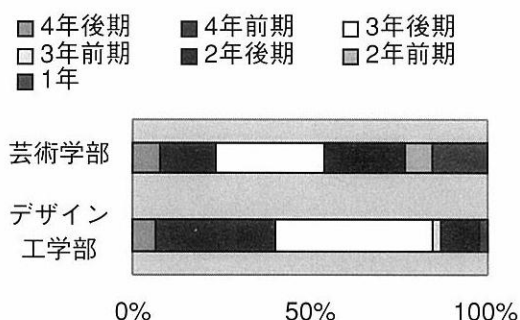


図5-2 就職を考え始めた時期

次に図5-2の就職、専門職を考え始めた時期について見てみる。一般大手企業では3年の冬休みに企業研修と称して優秀な学生の採用を決定している。遅くとも4年前期にはほとんど決定されているのが現状である。それからすると図4-2の就職を考え始めた時期が3年後期に両学部とも集中しているのは当然の事と言えなくもないが、後期といっても前半と後半では時期的にかなり開きがあり、後期前半ならまだよいが後期後半では遅いといえる。第一期生と言うこともあり実際は考え始めも活動の始めも遅かったようだが来年以降は徐々に改善されていくことだろう。芸術学部の1年から2年後期までの早い時期での割合が46.1%と高くなっているのは、デザイン工学部の3年後期における現実的な就職の捉え方ではなく漠然とした捉え方と考えられる。

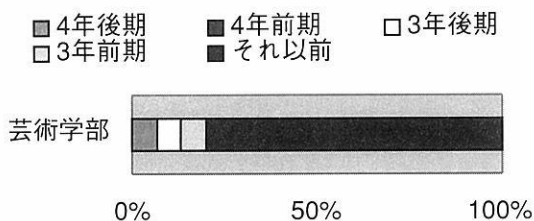


図5-3 専門職を考え始めた時期

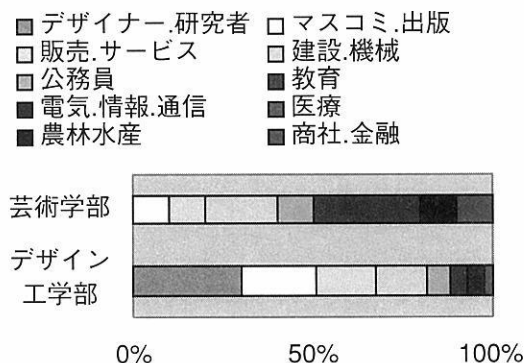


図5-4 就職する分野

一方図5-3の専門職を考え始めた時期では芸術学部の、それ以前の項目の割合が80%と高いのが特徴的である。多くの学生が専門職を目標として受験してくることを考えれば、それが数字に現われているといえる。デザイン工学部には図5-1の専門職を目指すに該当者がいなかったなので分析の対象とはならない。

次に図5-4の就職する分野をみるとデザイン工学部のデザイナー・研究者、マスコミ・出版、販売・サービス、建設・機械の割合が81.4%を占めている。これは大学で学んだ専門分野がそのまま就職に生かされているといえる。逆に芸術学部の場合は専門分野での就職は難しく専門性が生かしにくい。芸術学部で特徴的なのは教育関連の割合が30%と高いことだが、これは教員をしながら同時に自分の専門職も続けていきたいと考える学生も多いからである。

次に図5-5の就職先選択理由を見てみる。デザイン工学部では専門性を生かせる、将来性、高収入、社会に貢献しているの割合が全体の81.4%を占めているが、これは学生が堅実な選択をしている現われである。芸術学部ではデザイン工学部と比べて、専門性を生かせるの項目

の割合が低い。これは前記したように専門分野での職種が少ないことの裏付けでもある。また自分の時間がとれるの項目の割合が高いのは就職をしながらも同時に専門職を続けて行く時間をもちたいと望んでいる学生が少ないからである。

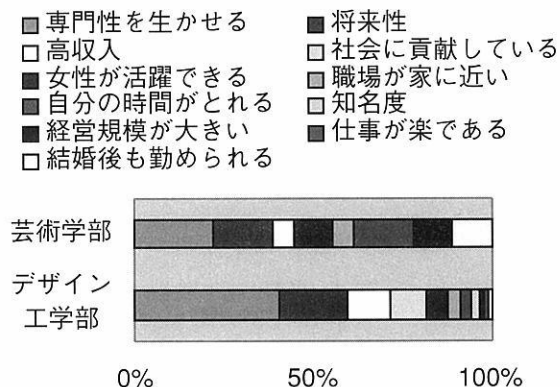


図5-5 就職先選択理由

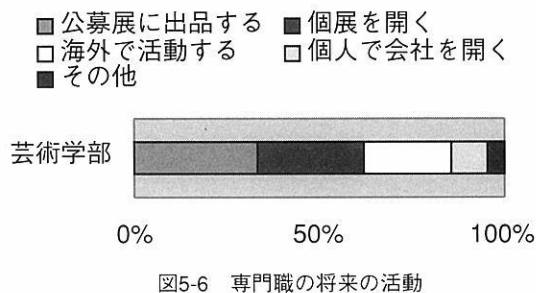


図5-6 専門職の将来の活動

図5-6は図5-1で専門職を目指すを回答した学生のみの結果なので芸術学部の学生が対象となっている。

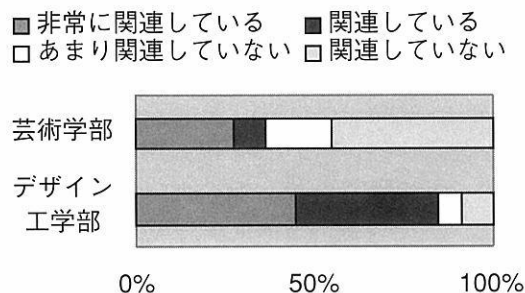


図5-7 就職と専門分野との関連性

図5-7の就職と専門分野との関連性をみてみる。大きな特徴は両学部が正反対の結果を表わしている点である。デザイン工学部が関連しているの割合が84.4%、そ

れに対し芸術学部は関連していないの割合が63.7%となっている。やはりここでも芸術学部においていかに専門に関連した職種が少ないかを物語っている。

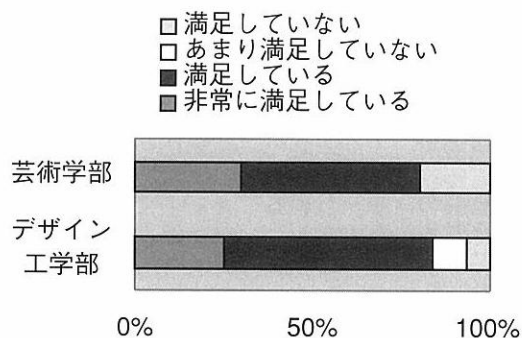


図5-8 就職先の満足度

最後に図5-8の就職先の満足度をみてみる。デザイン工学部が満足しているの割合が84.1%と高いのは自然な結果だが、芸術学部においても同様に80%と高い結果が出ている。たとえ専門分野とかかわりが少ない職種であっても、就職する事を目標としていた学生にとっては高い満足度をえているようだ。両学部とも80%以上の学生が満足していることは第一期卒業生の就職状況としては非常によい結果といえる。

(3) まとめ

全体をとうしてみると学生達の様々な意識や課題が浮き彫りにされ両学部の特徴がよく現われている。現代は就職難と言われる時代であるが、開拓次第ではまだまだ専門分野を生かせる職種があるはずである。学生達が充実した大学生活を送り、自信をもって社会にはばたいていけるように今回の意識調査の結果を踏まえてこれからの学生の指導に役立てていきたい。

6. チュートリアル活動の意義と課題

(1) 課題の設定

ここで検討するチュートリアル活動は、興味や関心を共有する教員と学生が授業を離れ、一つのテーマのもとに自発的な活動を展開していく本学独自の教育活動である。開学初年度に設けられたチュートリアルは14。その後、徐々に数を増やし、今年度は31のチュートリアルが開かれている。

そこには、①成員間の関心の共有、②教員の関与、③カリキュラム外の活動、④参加の自発性といった共通性を見いだすことができるものの、テーマの内容・参加対象者・活動形態・運営形態は、それぞれ大きく異なる。例えば、取り扱われるテーマは学部の専門的な内容から趣味的要素の強いものまで広く、参加対象者も学生に限定されていない。活動場所や活動時間帯も様々であり、活動形態には読書会型・研修旅行型・談話型・地域活動型といったヴァリエーションが見られる。

そうした多様性から生み出される全体像の把握の難しさや制度上の位置づけの曖昧さもあって、これまで、チュートリアルの組織特性やその活動の機能、本学の教育活動における位置づけなどについては検討されてこなかった。そこで、本章では、学生意識調査で得られたデータから明らかにできる範囲内で、チュートリアル活動の特性や意義、その課題について論じていくことにしたい。なお、チュートリアル活動の実態については、1996年12月に刊行される『チュートリアルレポート』を参照していただきたい。

(2) チュートリアル活動の特性

1) 課外活動としてのチュートリアル

本学のチュートリアル活動は、制度上「課外活動」としては位置づけられてはいない。しかしながら、それがカリキュラム外の活動として行われていることもあり、「課外活動」というイメージが強くなっている。

そこで、ここでは、まず、チュートリアルとクラブ及びサークル（以下「クラブ」と表記）への参加経験率を見ることによって、本学におけるチュートリアルの課外活動としての性格について確認しておくことにする。

チュートリアル及びクラブへの「参加経験の有無」について尋ねた図6-1を見ると、チュートリアルに「参

加したことがある」とする学生は4割弱、クラブへの参加経験者は6割となっている。

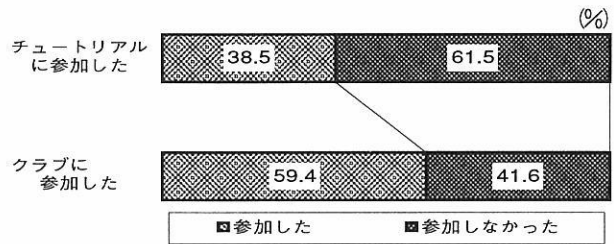


図6-1 チュートリアル及びクラブへの参加経験

山形大学の『学生生活実態調査』の結果は、これらの数値の意味を明らかにするうえで参考になる。そこでのサークル・クラブ活動への参加経験率（「参加している」と「参加したことがある」を加えたもの）は70%程度を占め、この数値との比較でみる限り、本学におけるチュートリアルの存在が、クラブへの参加率を著しく下げているとは言い難い。さらに、チュートリアルとクラブへの参加状況を詳しく調べてみると、チュートリアルとクラブの両方あるいはいずれかに所属している学生は、調査回答者のなかの4分の3を占めている（図6-2）。

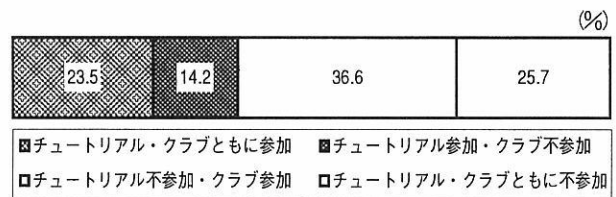


図6-2 チュートリアルとクラブへの参加状況

これらのことから、参加経験率という指標のうえでのことはあるが、本学では、チュートリアルはクラブの補完的機能をはたしつつ、クラブと並ぶ課外活動の一本の大きな柱になっていると言えそうである。

2) 課外活動としての特性

学生にとっては課外活動としての機能をはたしているチュートリアルであるが、その特性はどのような点にあるのだろうか。ここでは、その点について、特に性別データに着目しながら、クラブ活動と比較してみたい。

表6-1は、チュートリアルとクラブそれぞれについて「活動に対する満足度と価値づけ」を尋ね、それを性別で比較したものである。「満足度」の数値は、「すごく満足している」と「どちらかと言えば満足している」

の数値を加えてある。それを見てみると、チュートリアルでは男女の差が見られないのに対し、クラブでは、女子に比べて男子の方で数値が高くなっていることがわかる。

表6-1 性別に見たクラブとチュートリアルへの満足度(%)

項 目	男子	女子
チュートリアルに満足している	77.0	80.8
クラブに満足している	63.6	51.8

注)「とても満足している」と「どちらかといえば満足している」を加えたもの

さらに、クラブ活動で見られた満足度に関する男女差は、大学生活における「価値づけ」の違いを尋ねた結果のなかに顕著に表れていると言ってよい(表6-2)。チュートリアル及びクラブに一定の割合で価値を認める(「4分の1以上を占めた」とする)者の比率は、チュートリアルでは男女間で有意な差が見られないのに対して、クラブの方では男子の数値が女子の数値を大幅に上回る。

表6-2 性別に見たクラブとチュートリアルへの価値づけ(%)

項 目	男子	女子
チュートリアルは学生生活の4分の1以上を占めていた	56.6	59.8
クラブは学生生活の4分の1以上を占めていた	68.1	50.0

注)「すべてを占めていた」「2分の1を占めていた」「4分の1を占めていた」を加えたもの

以上の結果から、チュートリアルと比較すると、クラブでは、女子学生に比べて、男子学生がやりがいを持ち、満足感を感じていると言ってよいだろう。一方、チュートリアルの場合には、やりがいや満足度についての性による差異はないと言ってよい。

収集したデータの制約上、これ以上の分析は差し控えざるを得ないが、クラブの方が男子学生に適合的な文化的特性あるいは組織的特性をもっている点については興味深い。このことを裏返して言えば、チュートリアルは、クラブに比べて、男子学生だけではなく、女子学生にとっても満足感を得やすく、高い価値を付与できる文化的あるいは組織的特性をもっていると言えるようである。

3)チュートリアルのクラス担任制度的機能

学生、とりわけ新入生の大学生活への適応を促進するために、クラス担任制度を設けている大学も少なくない。本学でも、チュートリアル制度の発足の背景には、それがクラス担任制度に代わるものとして機能していくことへの期待があった。そこで、ここでは、チュートリアルへの参加行動に関する学年別データを利用しながら、現在のチュートリアルがクラス担任制度的な機能を果たしているのかどうかについて検討してみる。

チュートリアルへの参加経験率を学年別にみたものが表6-3である。そこでは、「参加した」とする者の比率が、1・2年次で3割前後、3・4年次で5割程度と、学年が上がるにつれて高くなる傾向が見られる。これは、クラブで各学年の参加率が一貫して6割前後の数値を示しているのとは対照的な結果である。現在のチュートリアルは、1・2年生にとって必ずしも間口の広いものとなっているわけではない。

表6-3 学年別にみたチュートリアルの参加経験・参加度(%)

項 目	1年	2年	3年	4年
チュートリアルに参加したことがある	29.9	35.9	51.9	50.0
チュートリアルにほとんど毎回参加した	33.3	31.5	44.3	42.9

また、参加者に対してチュートリアルへの参加度について見た結果からも、上記と同様の傾向がうかがわれる。「ほとんど毎回参加している」とする者の比率は、1・2年生で3割強、3・4年生で4割強と、参加度は学年が上がるにつれて高くなっている。1・2年生は3・4年生に比べて、参加経験率が低いだけでなく、参加者の間の参加の度合いも低いわけである。

しかしながら、その一方で、チュートリアルそのものにクラス担任制度的な機能が備わっていないというわけではない。表6-4は、「チュートリアルに参加して良かったこと」を尋ねた項目の一部であるが、「学内で友人が増えた」、「自分の趣味や興味を深めることができた」とする者の比率が1年次では6割近くを占め、他の項目と比べてかなり高い数値を示している。

このことから、現在のチュートリアルは、参加者にとって、友人を増やし、大学生活への適応を促進する機会としての機能をもっているものの、そこへの参加行動

を見るかぎり、特にそれが必要とされる1・2年生に対してその機能を十分に果たしているわけではないことが理解できよう。

表6-4 学年別にみたチュートリアルへの効用 (%)

項 目	1年	2年	3年	4年
自分の専門分野に役立つ知識や技術を身につけることができた	34.8	49.5	27.1	41.8
自分の専門分野以外の知識や技術を学ぶことができた	30.3	37.4	47.1	53.7
自分の趣味や興味を深めることができた	55.1	46.2	54.3	50.7
大学内で友人が増えた	59.6	50.5	48.6	43.3
良い思い出ができた	38.2	33.0	34.3	58.2

注) 複数回答

(3) チュートリアル活動の意義

本節では、本学における教育体制のなかで、チュートリアル活動がどのような意義をもつのかについて見ていく。具体的な課題は、チュートリアルへの関与の違いが学生の行動や成長感覚にどのような影響を与えているのかを見ることで、チュートリアルの学生にとっての教育的意義について明らかにしていくことである。

そこで、ここでは、チュートリアルへの価値づけが高い者ほど、そこに積極的に参加し、高い満足感を得ている(つまり、「関与の度合いが強い」という点に注目し、「チュートリアルへの価値づけ」を尋ねた項目をもとに、チュートリアル活動に強く関与している者とそうではない者を仕分けることにした。具体的には、チュートリアル活動が学生生活の「ほとんどすべてを占めていた」、「2分の1くらいを占めていた」、「4分の1くらいを占めていた」とする者を1つのグループにまとめ「高関与群」とし、「ほとんど占めていなかった」とする者を1つのグループにまとめ「低関与群」とした。また、比較の対象として、チュートリアルに参加しなかった者についても取り上げ、それを「不参加群」としている。

1) 地域交流を促進する機会

以上のような操作から得られた、チュートリアル活動の第一の意義は、学生が地域との交流を深める大きな契機の一つとなっている点である。

表6-5は、交流経験を上記のチュートリアル活動へ

の価値づけの強さの度合いによって整理したものである。まず、これまでの大学生活で「他大学との交流をもった」かどうかについて見てみると、そこでは、チュートリアルへの関与の度合いによる差異は見られない。どの群も数値は4割弱で一定している。

それに対して、「地域と交流をもったかどうか」についての回答結果は興味深い傾向を示している。つまり、チュートリアルに関与の度合いの強い者(高い価値づけを付与している者)ほど、「地域と交流をもった」と回答する者の比率が高くなっているのである。例えば、「不参加群」では2割強であったものが、「低関与群」では4割弱となり、「高関与群」では5割を超える。

表6-5 チュートリアルへの関与別に見た

交流経験・交流形式 (%)

項 目	高関与群	低関与群	不参加群
他大学との交流をもった	38.5	39.4	35.2
地域との交流をもった	51.1	37.4	23.0
地域イベントへの参加	71.0	53.7	53.5
地域のボランティアへの参加	14.0	19.5	11.4
企業や商店への作品展示	22.6	7.3	9.6
地域交流のためのイベントの企画	12.9	9.8	12.3
企業の勉強会への参加	0.0	2.4	1.8
企業からの作品や研究の委託	9.7	12.2	7.0
行政の勉強会への参加	7.5	4.9	1.8
行政からの作品や研究の委託	5.4	4.9	8.8
その他	11.8	24.4	28.1

注) 下段「交流形式」は複数回答

本学のチュートリアルでは、社会人を構成メンバーとしているものや地域の活性化、フィールドワーク、地域住民との交流を活動テーマとしているものが少なくない。そうしたこともあって、チュートリアルは大学と地域との交流機会を促進する機能をはたしているようである。

次に、同じ表で、地域との交流の具体的な形式について見てみると、「イベントへの参加」、「企業への作品展示」、「行政の勉強会への参加」などの項目で、「高関与群」の数値が高くなっている。ここには、本学の

チュートリアルがもつ活動形態の多様性が反映されていると言ってよいだろう。また、当然のことながら、地域との交流体験は、地域への理解を深めることになる。大学生活における成長感覚を尋ねた質問のなかで「山形の自然と文化について理解を深めることができた」とする者の比率は、「高関与群」では62.4%と他の2群の数値よりも高くなっている（表6-6）。

以上のように、本学のチュートリアルは、学生と地域との交流を促す機会として、また、学生の地域理解を深める機会として機能し、「地域に開かれた大学」という本学の教育理念を実現する活動の一端を担っている。

2) 人間形成の場

データから得られるチュートリアルの第二の意義は、学生の専門以外の領域での人間的な成長にとって大きな寄与をはたしている点である。

前述の表6-6は、「大学生活における成長感覚」をチュートリアルへの関与の違いによって整理したもの的一部分である。「自分の専門分野の知識や技術を身につけることができた」、「今後、自分の専門分野で仕事をしていくうえでの自信がついた」、「自分の適性や能力について知ることができた」といった専門分野での成長に関わる項目では、「高関与群」と「低関与群」との間に大きな差異を見いだすことはできない。

その一方で、「自分の専門分野以外の知識や技術を身につけることができた」とする者の比率は、「高関与群」73.7%、「低関与群」64.8%、「不参加群」56.4%となり、それぞれの間に1割近い開きが見られる。このことから、チュートリアルへの積極的な関与は、専門分野の領域でよりも専門分野以外の領域においてその効用を学生にもたらしめていることがわかる。

こうした傾向は、表6-7の「これまでの学生生活はどのようなものであったのか」という学生生活の意味づけを尋ねた結果にもはっきりと表れている。つまり、「専門的な知識や技術を習得する場」、「将来の職業生活に向けての準備を行う場」といった項目では、関与の度合いによる有意な差を見いだすことができない。それに対して、「人間性を高める場」という項目では、「低関与群」よりも「高関与群」の方が1割程度高く、「高関与群」の数値は「不参加群」の2倍となっている。反対に、「特になかった」とする者の比率は、「高関与群」では他の2つの群に比べてかなり低くなっている。

以上の結果から、チュートリアルは、学生の人間関係を広げ、学生生活の思い出を彩る課外活動な意味をもつだけでなく、専門分野における技量を支える幅の広い人間性を育てることに寄与していると言えるのである。

表6-6 チュートリアルへの関与別にみた学生生活における成長感 (%)

項 目	高関与群	低関与群	不参加群
山形の自然や文化について理解を深めることができた	62.4	54.4	48.2
自分の専門分野の知識や技術を身につけることができた	81.6	79.7	70.0
今後、自分の専門分野で仕事をしていくうえでの自信がついた	40.7	36.0	30.7
自分の適性や能力について知ることができた	67.6	64.5	56.0
自分の専門分野以外の知識や技術を身につけることができた	73.7	64.8	56.4

注)「おおいにあてはまる」と「少しあてはまる」を加えたもの

表6-7 チュートリアルへの関与別にみた学生生活の意味 (%)

項 目	高関与群	低関与群	不参加群
専門的な知識や技術を習得する場であった	25.3	24.8	22.0
豊かな教養を身につけ人間性を育てる場であった	34.2	25.7	17.5
将来の職業生活に向けて準備を行う場であった	1.3	3.7	3.0
多様な経験を積んでいく場であった	10.8	11.0	18.1
人的ネットワークをつくりあげていく場であった	25.3	22.0	21.3
特に何もなかった	3.2	12.8	18.1

注)「おおいにあてはまる」と「少しあてはまる」を加えたもの

(4) チュートリアル活動の課題

最後に、今回のデータから得られた範囲内で、チュートリアルが抱える課題について検討しておくことにする。具体的には、まず、チュートリアルへの参加者がどのような不満を抱いているのかを見、ついで、チュートリアルへの不参加者がどのような理由から参加していないのかについて見ていく。そして、そこから、チュートリアルの課題について若干の検討を行ってみることにする。

1) 活動内容への不満

表6-8は、チュートリアルへの参加者のなかで「チュートリアル活動に不満である」と回答した者にその理由を尋ねた結果である。ここでは、「活動内容が自分の考えと合わなかった」という項目の数値が5割を超えている点に注目できる。

特に、チュートリアルへの関与の度合い別にこの結果を見てみると、「低関与群」の6割が活動内容への不満を示していることがわかる。「低関与群」の学生では、施設や予算、活動における人間関係といった点よりも、活動内容が自分に合わないという点がチュートリアルへの関与を弱める大きな原因となっているようである。

チュートリアルでは、教員が活動内容や活動形態を提示して学生を集めるというスタイルをとるものが大半である。それゆえ、活動内容や形態の決定が教師主導になりがちになることも否めない。その点の限界がこの数値に表れていると見てよいだろう。

しかしながら、一方では、活動内容に不満をもつ学生に対して、チュートリアルの間口を広げていくこともできないわけではない。それは、学生が主体となって活動内容やその形態を決定し、教員の側にチュートリアルの開催を働きかけていくというスタイルが一般化すれば、活動内容への不満も軽減できるからである。

2) 時間的余裕の無さ

次に、チュートリアルへの不参加者について不参加の理由を見てみる。表6-9は、チュートリアルへの不参加者にその理由を尋ねたものの結果である。

やはり、ここでも、「活動内容への不満」が34.4%と第一位を占めている。性別でみると、特にその傾向は男子学生に強いことがわかる。この結果からみても、前述したように、学生が中心となってチュートリアルを発足させていける環境づくりが重要であると考えられる。

ついで、不参加の理由として目につくのは、学生側の時間的な余裕の無さである。「授業や課題が忙しい」とする者が33.0%、「アルバイトが忙しい」とする者が30.3%、「クラブ活動が忙しい」とする者が16.3%、「通学時間が長い」とする者が11.2%と、他の項目よりも高い数値を示していることがわかる。とりわけ、性別でみると、この理由をあげる者は男子よりも女子に目立っている。

本学のチュートリアルでは、定期的あるいは長期的に行われるものばかりではなく、短期集中型や一回型といった活動形態をとっているものもある。活動形態に関するそうした情報は、時間的な余裕の無い学生にとってみれば、活動への参加への一つのきっかけを与えるものとなろう。

ちなみに、「時間的な余裕の無さ」に関する項目を学年別に見ると、「授業や課題が忙しい」、「アルバイトが忙しい」という理由をあげる者の比率は3・4年次で高く、1・2年次での数値が相対的に高い項目は「通学時間が長い」というものだけである。ここでの結果をみる限り、前述した1・2年次の不参加率の低さの理由を「時間的な余裕の無さ」に求めることはできないことがわかる。

しかしながら、今回の調査結果からは、なぜ1・2年

表6-8 チュートリアルへの関与別にみた不満の理由 (%)

項 目	総計	高関与群	低関与群
施設がなかった	7.0	0.0	9.8
施設の使用時間が確保できなかった	11.3	11.8	9.8
対人関係がうまくいかなかった	12.7	17.6	9.8
活動内容が自分の考えと合わなかった	54.9	41.2	60.8
予算が少なかった	12.7	17.6	11.8

注) 複数回答

表6-9 性別・学年別にみたチュートリアルに参加しなかった理由 (%)

項 目	総計	男子	女子	1年	2年	3年	4年
授業や課題で忙しかったから	33.0	30.0	35.5	32.0	25.9	45.5	41.3
クラブ活動で忙しかったから	16.3	14.6	17.9	19.8	10.8	16.7	17.5
アルバイトで忙しかったから	30.3	26.7	33.6	26.1	29.1	39.4	38.1
通学に時間がかかったから	11.2	6.5	15.6	14.0	12.0	1.5	9.5
活動内容に魅力を感じなかったから	34.4	39.3	29.8	32.0	38.0	40.9	27.0
対人関係が煩わしかったから	9.0	7.7	10.3	5.9	12.0	19.7	1.4
経済的な負担が大きかったから	4.5	4.0	5.0	6.3	3.2	4.5	1.6
拘束されるのが嫌だったから	17.9	21.9	14.1	16.7	15.8	24.2	20.6
学生主体の活動ではなかったから	2.8	3.2	2.3	1.8	4.4	1.5	3.2
課外は教員と時間を過ごしたくなかったから	1.2	1.6	0.8	0.0	1.3	1.5	4.8
チュートリアル活動の存在を知らなかったから	7.7	7.3	8.0	7.7	8.9	6.1	6.3
健康上参加できなかったから	1.0	0.8	1.1	1.4	0.0	3.0	0.0

注) 複数回答

生の不参加率が高いのかを明確に説明できるデータを見いだすことはできなかった。もし、チュートリアルにクラス担任制度的な機能を期待するとするならば、1・2年次の学生に対してその敷居を高くしている要因について明らかにしていくことは今後の課題となる。

(5) まとめ

チュートリアル活動は、これまで、本学の教育体制のなかで多くの機能を請け負ってきたと言ってよい。具体的には、①学生にとっての課外活動としての機能、②クラス担任制度の代替制度としての機能、③完成年度までのカリキュラムの不足を補う補習ゼミナールとしての機能、④大学と地域との交流を促進する拠点としての機能、⑤本学独自の文化形成及び情報発信に関わる拠点としての機能などである。

しかしながら、調査結果からもわかるように、時間の経過とともに、チュートリアル活動はこれまで請け負ってきたクラス担任制度の代替機能や専門教育の補助的機能を弱め、その独自性を強めつつあると見ることができる。そして、その独自性とは、男女両方の学生に適切な文化特性あるいは組織特性をもった課外活動としての性格を残しながら、地域との交流を促進する機会としての機能や専門分野以外の領域における学生の成長を促し、人間性の涵養に資する機能を強めている点にあると言ってよいのではないだろうか。

弱まりつつある機能をチュートリアルの教育的機能の低下としてとらえるならば、その新たな変化は、研究的

機能の強化という方向への変化としてみてとることができる。そして、それは、大学や専門領域の枠組みを超えた多様な交流に支えられていることで、大学と地域社会そして専門領域とそれ以外の領域との融合による学際的な性格をもち、高い情報発信性を備えていると言えそうである。

しかしながら、以上のような論点は、あくまでも学生の意識の表層を分析したものから抽出した仮説的考察にすぎない。その実証性を高めるためには、チュートリアルの活動内容に関する具体的分析、担当教員の意識や評価、そして学生のより詳細な活動様式や評価についての分析を行うことが今後の課題として残されている。

参考文献

- 1) 山形大学自己評価委員会編『魅力ある大学をめざして—学生の受入れ・生活・就職』山形大学, 1995
- 2) 東北芸術工科大学チュートリアル会議編『チュートリアルレポート』東北芸術工科大学, 1996年12月刊行予定